

4.3.10 ハチクマ

(1) 文献及び現地調査結果による現状把握

文献及び現地調査の結果、全県 380 メッシュ中、生息確認の情報があつたものは 62 メッシュであつた (図 4-49(1))。このうち、繁殖情報 (繁殖の可能性ありを含む) があつたものは 3 メッシュであつた。

確認場所は北上山地や栗駒山から船形山にかけての山地、二口溪谷周辺や蔵王周辺の山地、大崎平野、宮床ダム周辺、仙台市南部から名取市西部の山地等であつた。このうち、海岸部や平地における確認は、渡り通過時における一時的なものも含まれている。

営巣地の情報は、北上山地や仙台市の丘陵地において、3 地点で確認された (図 4-49(2))。営巣地を含め繁殖に係わるデータが少ないのは、本種の行動圏が広く、巣の特定が困難であること、広葉樹やスギ等の見つけにくい場所に巣を架けることも一因と考えられる。

このように、県内のハチクマは、分布が局所的であること、渡り通過時における一時的な利用のみの生息地もあること、繁殖情報が乏しく営巣地も限定的であることから、生息実態は不明である。今後の調査により生息情報、特に繁殖に係わる情報が得られた際には、それらの生息地について保全上留意することが望ましいと考えられる。

なお、前回調査時には、本種は調査対象種ではなく生息情報も得られていないことから、生息情報地域の比較は行わなかつた。

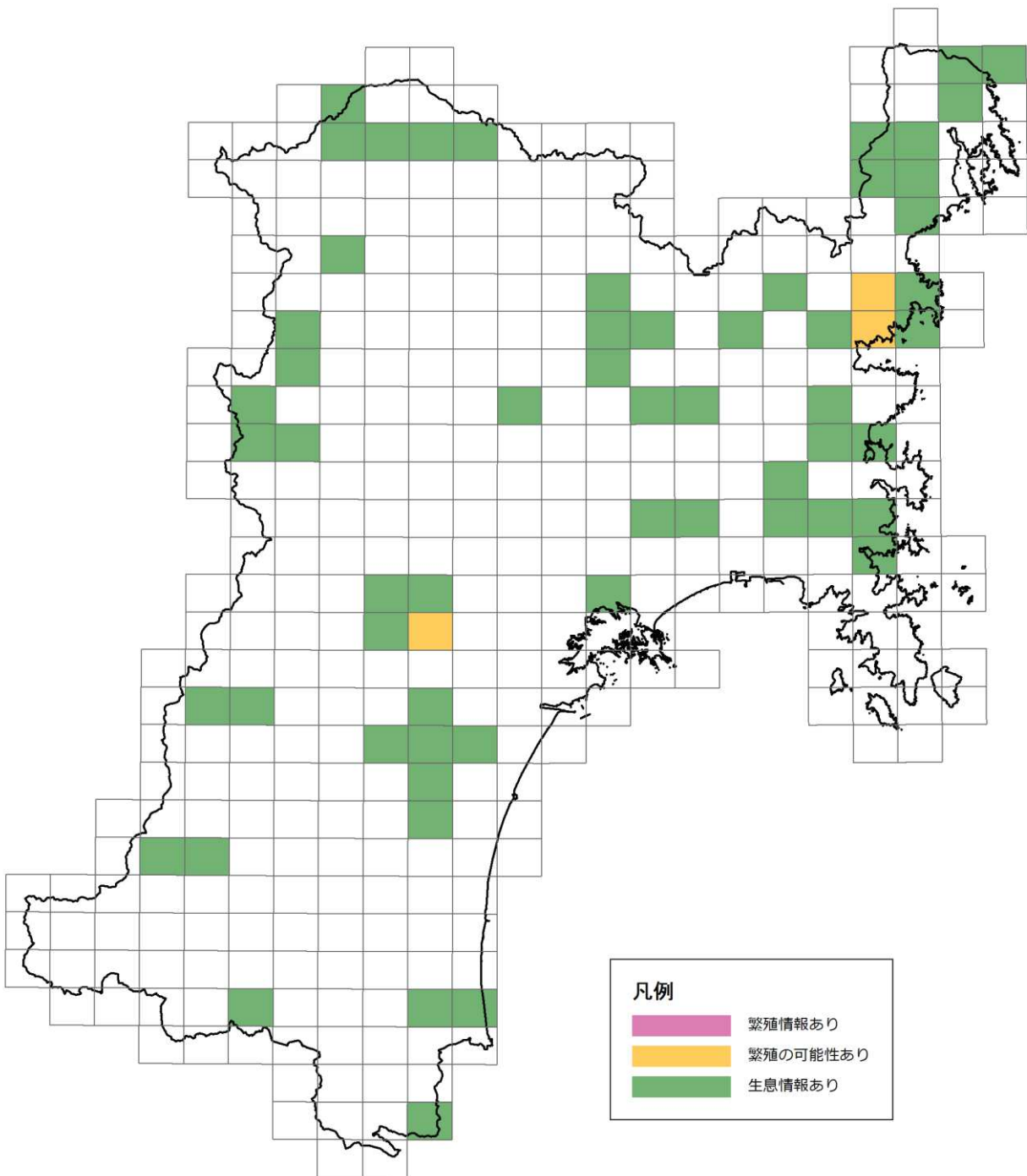


図 4-49(1) ハチクマ：生息情報地域（文献調査結果及び現地調査結果）

種の保護の観点から非公表

図 4-49(2) ハチクマ：営巣地情報の位置（文献調査結果及び現地調査結果）

4.3.11 ツミ

(1) 文献及び現地調査結果による現状把握

文献及び現地調査の結果、全県 380 メッシュ中、生息確認の情報があつたものは 19 メッシュであつた（図 4-50）。なお、繁殖情報はなかつた。

確認場所は鳴子や船形山周辺の山地、七北田川流域の一部、松島湾周辺の丘陵地、名取市西部の山地、北上山地や阿武隈山地の一部等で散在していた。

このように、県内のツミは、生息情報が乏しく分布も局所的であること、繁殖情報も得られていないことから、県内における生息実態は不明である。今後の調査により生息情報、特に繁殖に係わる情報が得られた際には、それらの生息地について保全上留意することが望ましいと考えられる。

なお、前回調査時には、本種は調査対象種ではなく生息情報も得られていないことから、生息情報地域の比較は行わなかつた。

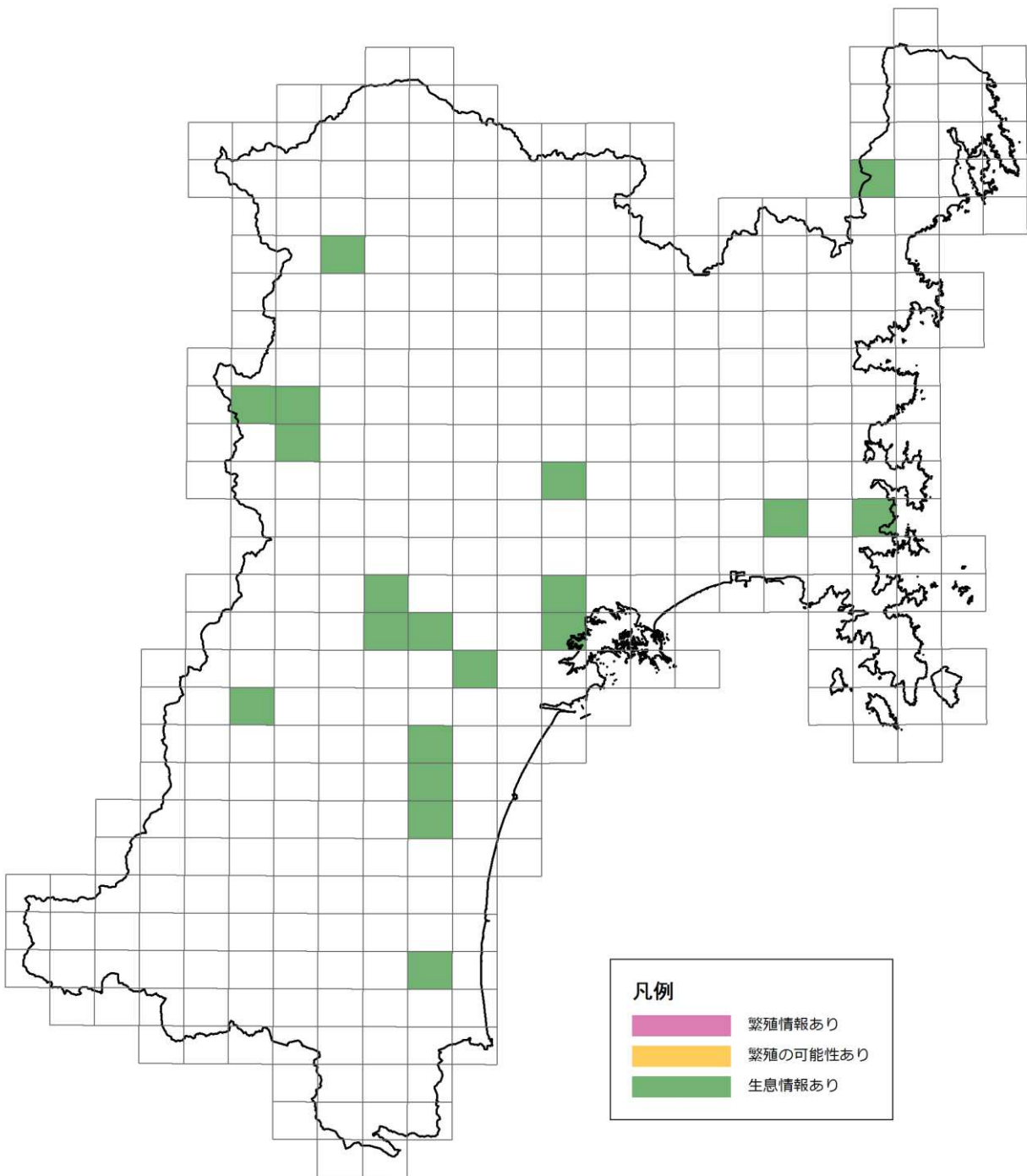


図 4-50 ツミ：生息情報地域（文献調査結果及び現地調査結果）

4.3.12 ハイタカ

(1) 文献及び現地調査結果による現状把握

文献及び現地調査の結果、全県 380 メッシュ中、生息確認の情報があつたものは 138 メッシュであつた（図 4-51(1)）。このうち、繁殖情報（繁殖の可能性ありを含む）があつたものは 5 メッシュであつた。

確認場所は北上山地や北上川流域、鳴子から二口峠にかけてと蔵王周辺の山地、阿武隈山地の一部、松島湾から仙台湾南部にかけての海岸部、内陸部の平地や丘陵地等であつた。

営巣地の情報は、北上山地や奥羽山脈の薬菜山周辺、仙台の丘陵地において、14 地点で確認された（図 4-51(2)）。営巣地を含め繁殖に係わるデータが少ないのは、本種の巣が比較的空間が狭く見つけにくい林内に架けられることも一因と考えられる。

前回調査と比較すると、前回調査及び今回調査のいずれも情報があつたものは 39 メッシュ、今回調査のみ情報があつたものは 99 メッシュ、前回調査のみ情報があつたものは 43 メッシュであつた（図 4-51(3)）。今回調査で新たに確認された場所は、北上山地や北上川流域、松島湾周辺、岩堂沢ダムから船形山にかけての山地、仙台市から柴田町にかけての平地や丘陵地等であり、前回調査で確認された内陸の丘陵地や山地周辺では生息情報がなかつた。今回調査で新たに確認された理由として、インフラ事業や震災復興関連等の環境調査の実施に伴う情報量の増加が考えられる。一方、今回調査では確認されなかつた場所については、環境調査が実施されていない場所に該当していたり、山地のため生息確認が困難である等の理由が考えられる。

このように、県内のハイタカは、北上山地や県中部を中心に広く生息しているものの、繁殖情報が乏しく、生息実態は不明である。今後の調査により生息情報、特に繁殖に係わる情報が得られた際には、それらの生息地について保全上留意することが望ましいと考えられる。

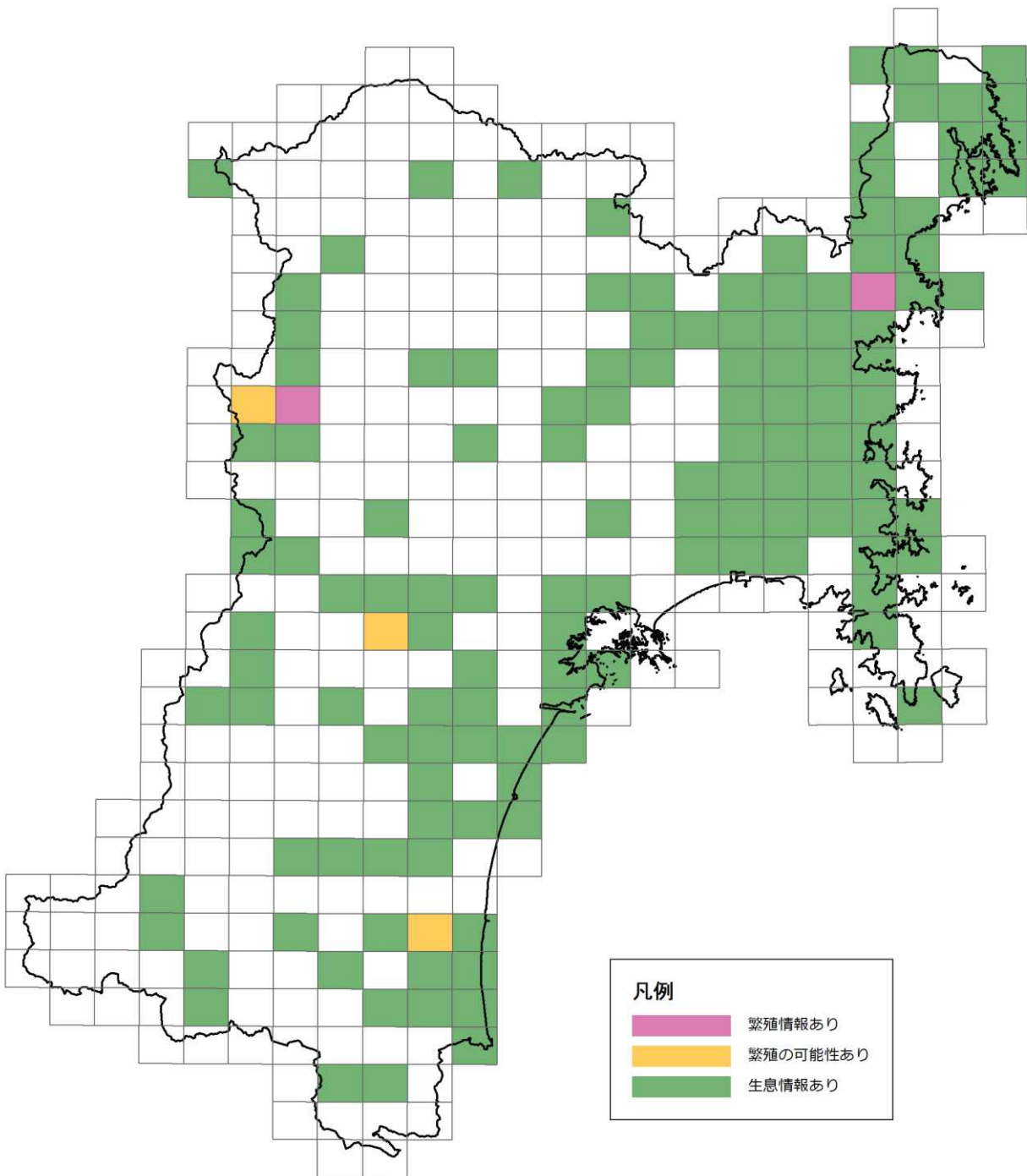


図 4-51(1) ハイタカ：生息情報地域（文献調査結果及び現地調査結果）

種の保護の観点から非公表

図 4-51(2) ハイタカ：営巣地情報の位置（文献調査結果及び現地調査結果）

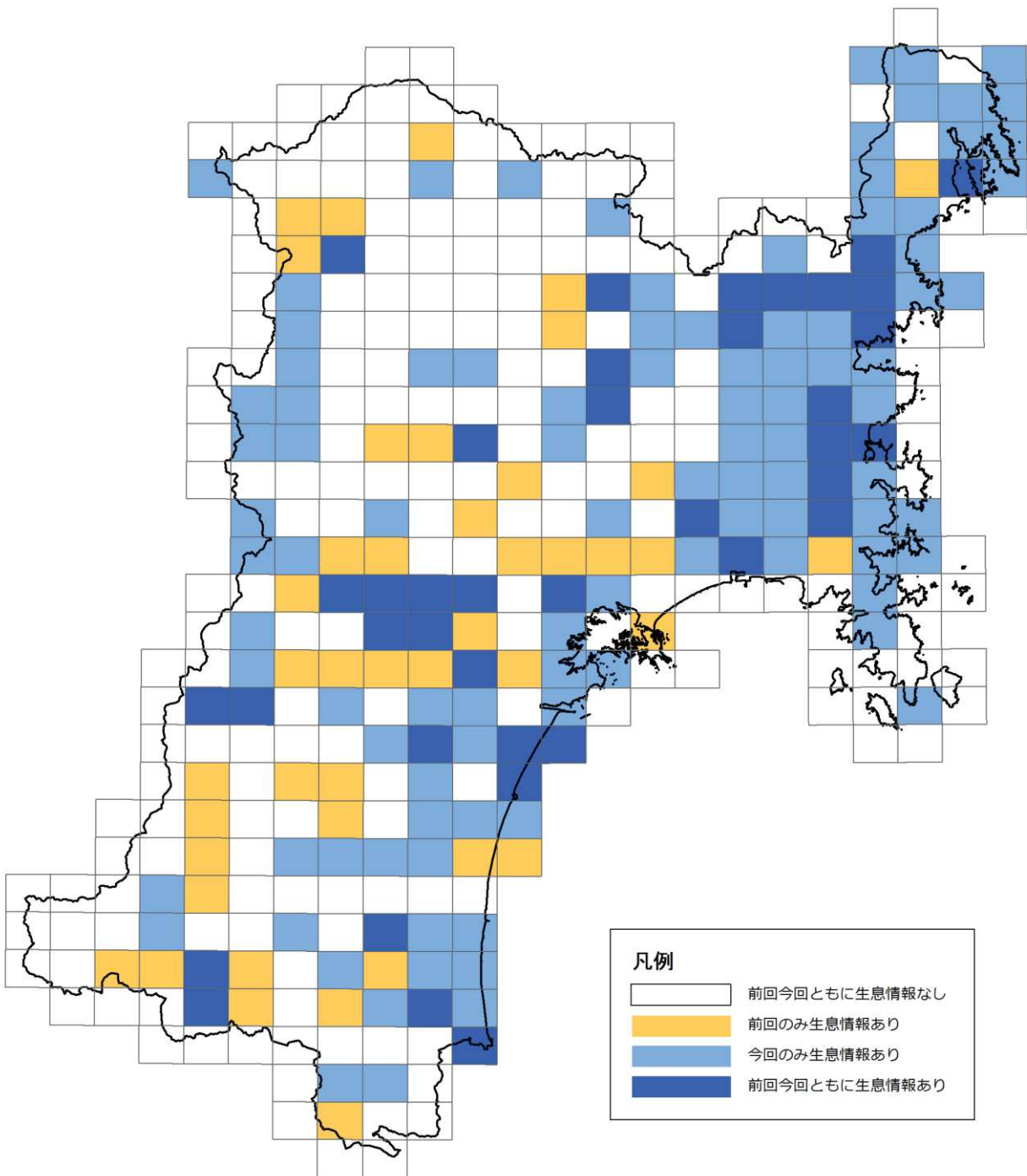


図 4-51(3) ハイタカ : 生息情報地域 (前回調査結果との比較)

4.3.13 チゴハヤブサ

(1) 文献及び現地調査結果による現状把握

文献及び現地調査の結果、全県 380 メッシュ中、生息確認の情報があったものは 26 メッシュであった (図 4-52)。このうち、繁殖情報 (繁殖の可能性ありを含む) があったものは 2 メッシュであった。なお、営巣地の情報はなかった。

確認場所は北上山地の太平洋側の一部、北上川流域の一部、塩釜湾周辺のほか、内陸部の平地から山地にかけて散在していた。

このように、県内のチゴハヤブサは、生息情報が乏しく分布も局所的であること、繁殖情報も得られていないことから、県内における生息実態は不明である。今後の調査により生息情報、特に繁殖に係わる情報が得られた際には、それらの生息地について保全上留意することが望ましいと考えられる。

なお、前回調査時には、本種は調査対象種ではなく生息情報も得られていないことから、生息情報地域の比較は行わなかった。

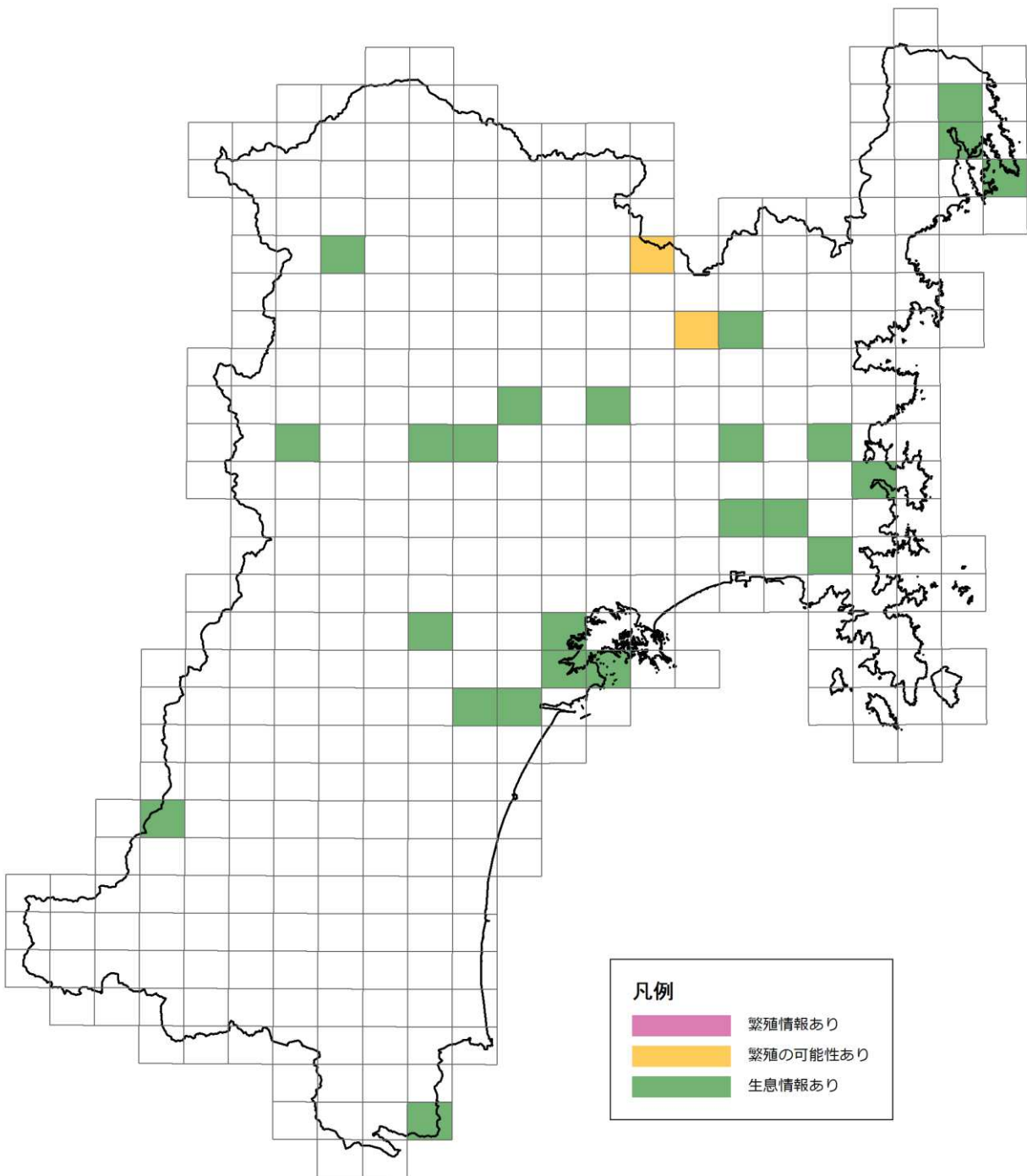


図 4-52 チゴハヤブサ：生息情報地域（文献調査結果及び現地調査結果）

4.4 県内における猛禽類の生息現況の総括

文献調査、現地調査及び生息情報分析の結果から、県内における猛禽類の生息現況を下記のとおり総括した。

宮城県内は東側に北上山地、西側に奥羽山脈が南北に連なり、北上川や鳴瀬川、名取川、阿武隈川の各流域の下流域が平野部となり、広大な水田地帯が広がっているほか、伊豆沼や蕪栗沼などの自然湖沼が点在している。平野と山地の間には低標高の丘陵地が分布し、その合間には谷津田がモザイク状に広がり中山間地の景観を呈している。沿岸部を見ると、南三陸地域は切り立った崖と湾が複雑に入り組んだリアス式海岸となっており、仙台湾岸にはクロマツを中心とした防潮林が帯状に植林されている。

北上山地では、1950～1970年代の拡大造林期に一斉に伐採・新植が進められ、幼齢の人工林が広く分布していたほか、放牧地や茅場として利用される場所も多かった。これらの場所はイヌワシの好適な狩場として利用され、前回調査の報告書では北上山地にはイヌワシ 4 ペアの生息が確認されていた。しかし、森林施業や茅場に代表される里山利用が衰退した結果、イヌワシが利用可能な好適狩場がほぼ現存せず、今回の調査では 3 ペアの消失が確認され、県内における絶滅の危険性が極めて高い状態にあることが明らかとなった。

奥羽山脈には、自然度の高い落葉広葉樹林が広がっており、多雪地帯のため急峻な雪崩地形が多く見られる。このような場所は人手が入りにくく、開発も進んでいないため、森林生態系の頂点に立つクマタカが高密度で分布している地域があり、インフラ関係の環境調査等による情報の蓄積もあり、前回調査時より営巣地の情報が増えている。また、イヌワシも 1 ペアの営巣地が確認され、全国的に見ても高い繁殖成功率を維持しており、この状況は前回調査がとりまとめられた平成 12 年頃と大きな変化は生じていない。

なお、ハチクマやツミ、一部のオオタカやサシバ等も繁殖環境として利用していると考えられるが、これらの種を主対象とした調査が行われていないことや、今回の調査でも補足的な生息状況把握に留まったことから、現状では生息情報が不足している。繁殖状況等の実態解明にはさらなる情報の蓄積が必要である。

平野部や都市近郊の丘陵地には、主にオオタカが生息している。オオタカに関しては、全国的な傾向と同様に県内の個体数が増加している可能性があることや、震災復興に伴う環境調査が盛んに行われた結果を受け、前回調査時より営巣地の情報が増えている。また、都市近郊の崖地や人工構造物で繁殖するハヤブサも確認された。このような都市域への進出は全国的に見られる傾向であり、今後も生息動向の変化を注視する必要がある。

なお、チゴハヤブサも繁殖している可能性はあるが、現状では情報不足である。

丘陵地の谷津田環境には、主にサシバが生息する。生息適地は県内に広く分布するが、水田を中心とした耕作放棄地の広がりによって生息環境は縮小傾向にあるとみられる。前回調査時のデータはないものの、全国的にみるとサシバの個体数は減少傾向にあり、今後も生息動向の変化を注視する必要がある。

北上川下流域や自然湖沼には広大なヨシ原が分布し、チュウヒが越冬地として利用するほか、内陸の自然湖沼はオジロワシも越冬地として利用する。内陸の自然湖沼については、ラムサール条約登録湿地も増え、保護の枠組みは整いつつあるといえる。

一方、河川下流域のヨシ原は、東日本大震災時に生じた津波による流出や、地盤沈下による冠水域の拡大等の影響を受け、チュウヒの好適な狩場が縮小している。震災後は地盤が隆起しており、狩場としての機能の回復について注視する必要がある。仙台湾沿岸部の被災地では、新たにヨシ原が出現しているがパッチ状であり、今後は農地などに復元される可能性が高いことから、恒久的な生息地にはなり難いと考えられる。このように前回調査と比べると、特に河川下流域・海岸後背のヨシ原は減少傾向にあり、現在残されている越冬地をいかに保全するかが課題である。

南三陸地域の沿岸部に広がるリアス式海岸は、ミサゴやハヤブサの繁殖地となっている。震災による繁殖への影響を一時的には受けた可能性があるものの、今回の調査で多数の営巣地を確認したことから、繁殖環境としてのポテンシャルは回復しているものと考えられる。特に、ミサゴはかなりの高密度で巣が分布し、増加傾向にあると考えられる。内陸側への進出もそれを裏付けているとみられる。また、ハヤブサも前回調査時より営巣地の情報が増えており、今回調査や震災復興に伴う環境調査が盛んに行われた結果によるほか、ミサゴと同様に増加傾向にある可能性も考えられる。

一方、オオワシは越冬地として沿岸部を利用しているが、震災後に越冬個体数が激減した。この原因としては、震災による沿岸漁業の衰退、特に主要な食物資源であるギンザケの養殖施設が壊滅的な被害を受けたことが考えられる。

沿岸部の防潮林では、前回調査時もオオタカの営巣が確認されていた。しかし、これらの防潮林は震災の津波により大部分が消失し、残存林でオオタカやミサゴが営巣しているものの、現状では防潮堤工事や海岸林の再整備事業等の復旧・復興工事によるインパクトを受けている可能性がある。また、防潮林の消失により開放地が増えた結果、ノスリが進出してオオタカとの営巣地の獲得競争が発生する懸念もあることから、今後も生息動向の変化を注視する必要がある。